

6 3 6 1 - 1 2 1 6
平成 2 2 年 9 月 2 8 日

各関係機関の長
各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 6 号について
平成 2 2 年度病虫害発生予報第 6 号を発表したので送付します。

平成 2 2 年度病虫害発生予報第 6 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

発生予報の概要

作物名	病虫害名	発生量の 平年比	記載ページ
大豆及び野菜・花 き類	1 ハスモンヨトウ等のチョウ目(鱗 翅目)害虫	やや多	2
トマト	1 トマト黄化葉巻病(TYLCV)		2
ウリ類	1 黄化えそ病(MYSV) 2 キュウリ・メロン退緑黄化病(CCYV)		3 3
カンキツ類 (露地栽培)	1 ミカンハダニ	やや多	3
果樹全般	1 果樹カメムシ類		3
茶	1 炭疽病 2 チャノコカクモンハマキ 3 チャハマキ 4 チャノホソガ 5 カンザワハダニ 6 チャノミドリヒメヨコバイ 7 チャノキイロアザミウマ 8 クワシロカイガラムシ	やや多 並 並 やや多 並 やや多 やや多 やや少	5 5 5 6 6 6 6 7

は防除情報を発表

作物の生育状況(9月中旬)

普通期水稻は乳熟期～黄熟期、極早生うんしゅうみかんは収穫期、その他のカンキツ類は果実肥大期、茶は秋芽生育期であった。

向こう1か月の気象予報

天気は数日の周期で変わり、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は高い確率 50%、降水量は平年より多い確率 40%、日照時間は少ない確率 40%と予想されている。
(1 か月予報 鹿児島地方気象台 9月24日発表)

発生予報の根拠および防除対策

大豆及び野菜・花き類

1 ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫（やや多）

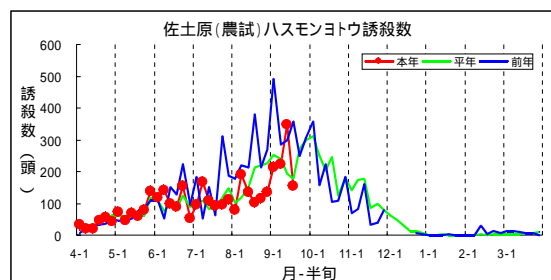
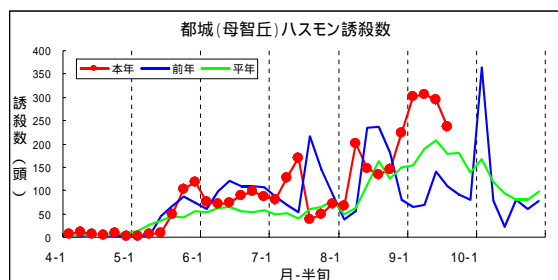
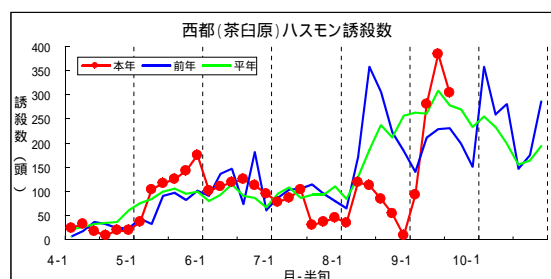
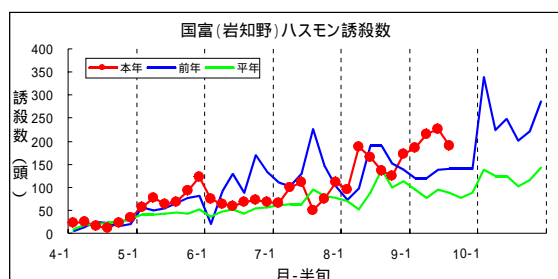
平成22年度病害虫発生予察防除情報第5号（9月28日発表）参照

[予報の根拠]

- (1) 国富、都城、西都、佐土原に設置したフェロモントラップによる誘殺数は、いずれの地点も9月以降多く推移している。
- (2) 向こう1か月の気温は、平年より高い確率50%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期の小さい内に防除する。



トマト

1 トマト黄化葉巻病(TYLCV)

[防除上の注意]

- (1) 病原ウイルスは、タバココナジラミ類（シハ¹-リ²-コナジ³ラミ、タ⁴ハ⁵コナジ⁶ラミ⁷イオタイ⁸Q）によって伝搬されるので、媒介虫の施設内への飛び込みを防止し、増殖しないよう防除を行う。また発病株は見つけ次第抜根し、ほ場から持ち出し埋没処分する。
- (2) 育苗期に感染すると被害が激しく、全滅する場合もあるので、媒介虫の施設への侵入を防ぐため、育苗・栽培施設の開口部には、0.4mm以下の防虫ネットを設置するとともに、育苗期間中の防除を徹底する。
- (3) タバココナジラミ類は、一旦密度が増加すると防除が難しいので、定植時に粒剤処理を行うとともに発生初期の防除を徹底する。また、黄色粘着トラップを設置し、早期発見・密度抑制に努める。
- (4) 特に、タバココナジラミ バイオタイプQは、各種薬剤に対する感受性が低く防除効果が劣る場合があるので、適切な薬剤の選択が必要である。
- (5) タバココナジラミ類は多くの植物に寄生し、増殖するので、育苗・栽培施設内外の除草を徹底するとともに栽培目的以外の作物や観葉植物等を持ち込まない。

ウリ類

1 黄化えそ病(MYSV)

[防除上の注意]

- (1) 一部地域の露地きゅうりで確認され、徐々に拡大傾向にあることから、今後、現在未発生地域やこれから栽培が始まる作型や他のウリ科作物への感染の拡大が懸念される。詳細については、平成22年度病害虫発生予察注意報第2号(8月19日発表)を参照のこと。
- (2) 最近、本病を媒介するミナミキイロアザミウマに対し、各種薬剤の感受性低下が確認されており、多発してからでは防除が難しくなるので、本虫の土中や地表面での蛹化を防止するためのマルチ被覆や誘殺のための青色粘着板の設置等、総合的な防除対策を講じる。
- (3) 施設栽培においては、媒介虫の施設への侵入を防ぐため、開口部に0.4mm以下の防虫ネットを必ず設置するとともに、近紫外線カットフィルム等の物理的防除手段を利用する。

2 キュウリ・メロン退緑黄化病(CCYV)

[防除上の注意]

- (1) 病原ウイルスは、タバココナジラミ類(シハ^レリ^コナジ^ラミ、タ^ハコ^コナジ^ラミ^ハイ^クイ^フク)によって伝搬されるので、媒介虫の施設内への飛び込みを防止し、増殖しないよう防除を行う。
- (2) きゅうりでは、特に摘心栽培で影響が出やすく、発生の程度によっては収量の減少につながる。メロンでは、感染した場合、着果とともに症状が激しくなり品質・収量が低下する。
- (3) きゅうり、メロンとも、育苗期からの感染防止に努め、特にメロンでは開花結実期までの防除を徹底する。
- (4) 草勢の低下により症状が進行する危険度が高まるため、葉面散布等の実施により草勢の維持管理に努める。
- (5) 防除対策については、トマトの黄化葉巻病の項を参照する。

カンキツ類(露地栽培)

1 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率50.0%(平年36.7%)、寄生葉率9.8%(平年6.6%)はいずれも平年よりやや多である。
- (2) 向こう1か月の気温は、高い確率50%と予想されている。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除効果が劣るので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に、発生初期に防除を行う。
- (2) 同一及び同系統の薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ-テ-ション散布を実施する。

果樹全般

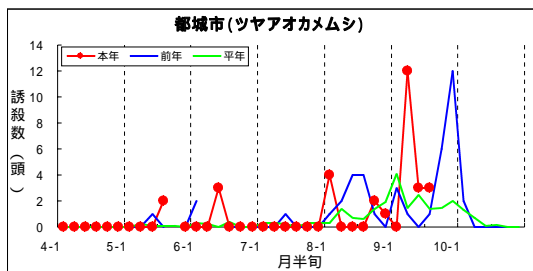
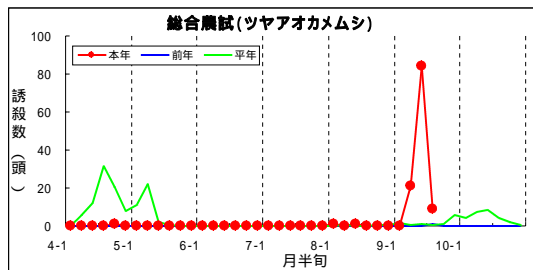
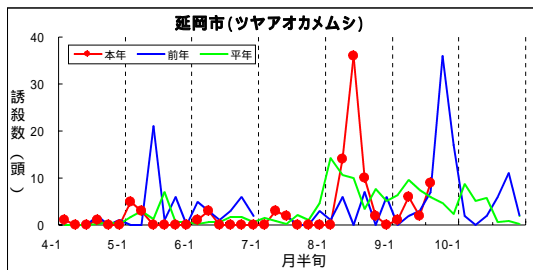
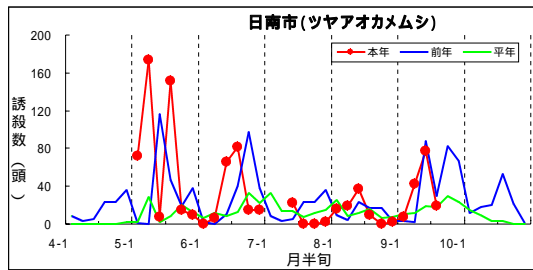
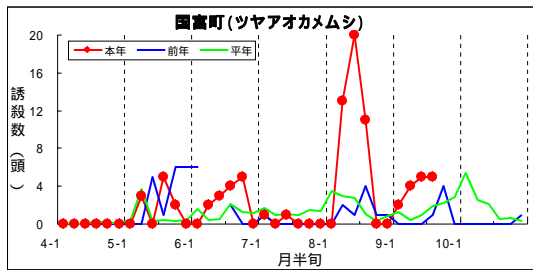
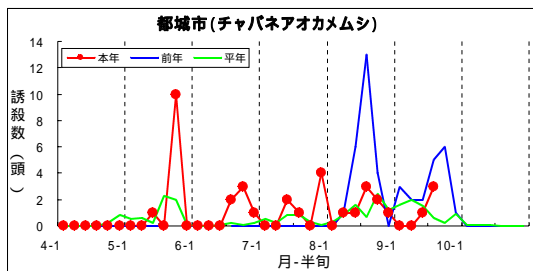
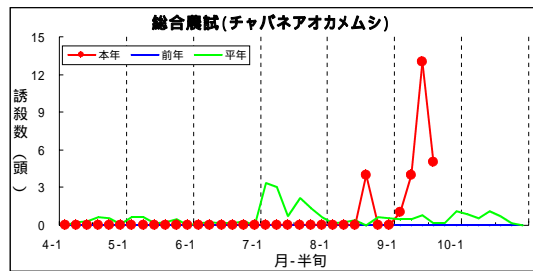
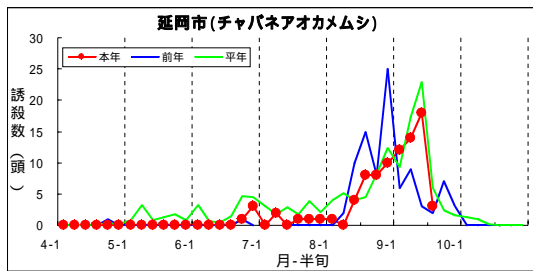
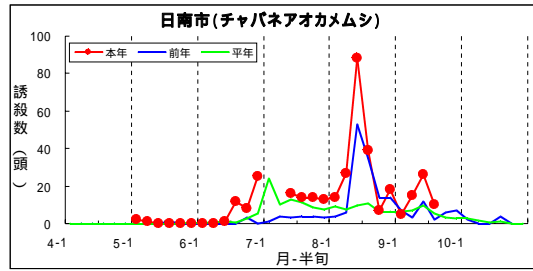
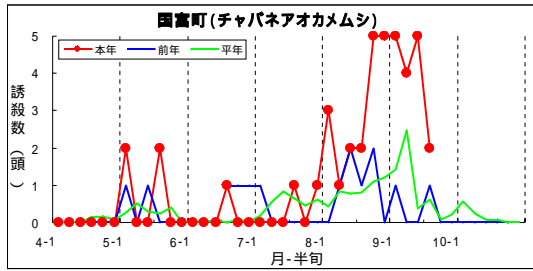
1 果樹カメムシ類

[防除上の注意]

- (1) 県内に設置している予察灯への誘殺状況は、チャバネアオカメムシ、ツヤアオカ

メムシのいずれも8月中旬以降多くなっているので注意する。

- (2) 果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努める。
- (3) うんしゅうみかんでは、色ぬけから着色始め頃の加害は落果を生じやすく、特に注意が必要である。



茶

1 炭疽病 (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率58.8% (平年54.2%)、 m^2 当り病葉数6.7葉 (平年4.2葉)
はいずれも平年よりやや多である。

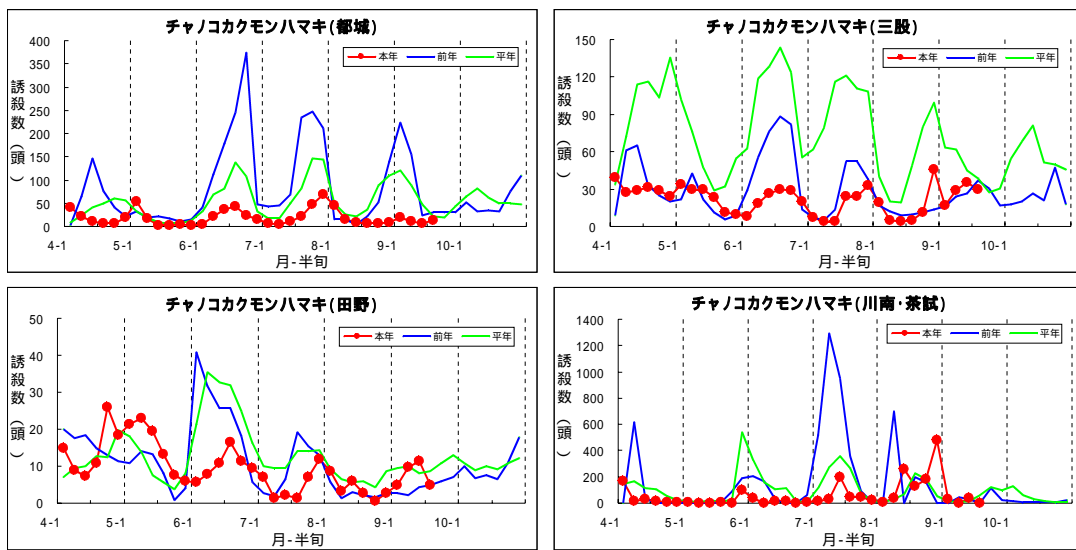
2 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の巡回調査では、発生未確認である。
(平年値：発生面積率0.6%、 m^2 当り虫数0.0頭)

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップ調査での誘殺数は、都城及び三股では平年より少ないが、田野及び茶業支場(川南)では平年並である。



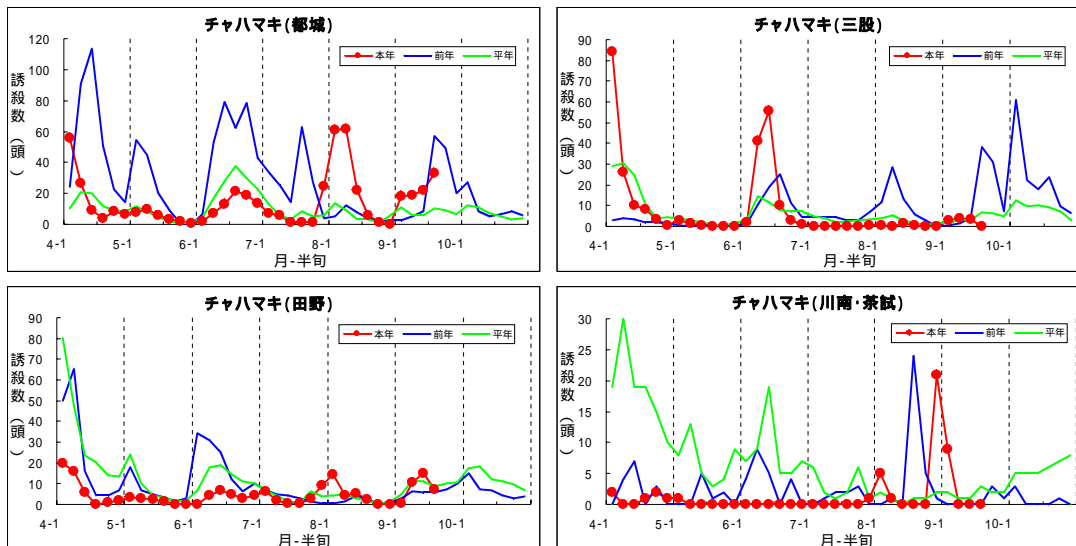
3 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の巡回調査では、発生を認めていない。(平年の発生面積率0.0%)

[防除上の注意]

- (1) フェロモントラップ調査での誘殺数は、都城、田野において9月に入り増加傾向にある。



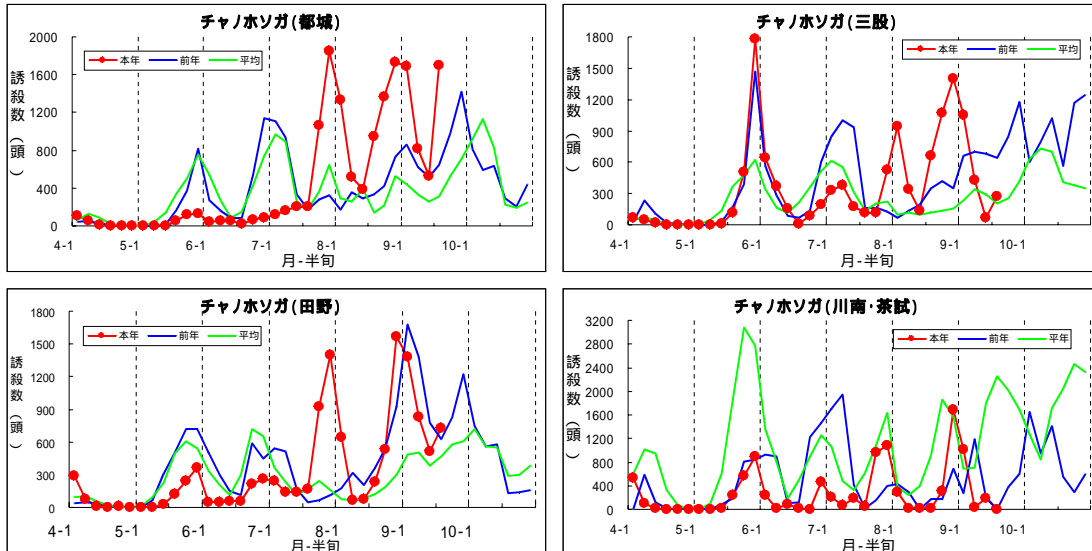
4 チャノホソガ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率41.2% (平年46.6%) は平年並、 m^2 当たり巻葉数8.8葉 (平年2.4葉) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) フェロモンラップ調査での誘殺数は、茶業支場(川南)は平年並であるが、都城、三股、田野のいずれの地区も8月末から9月初めにかけて平年より多く推移している。



5 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率35.3% (平年34.6%)、寄生葉率1.3% (平年3.0%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は越冬前の10月中下旬である。本県では冬期でもダニの繁殖が見られるため越冬前の防除がより重要で、この時期の防除が十分でないとな翌年の一番茶への影響が大きい。
- (2) 同系統の薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のロ - テ - ション散布を実施する。

6 チャノミドリヒメヨコバイ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の見取り調査による発生面積率58.8% (平年38.7%) は平年よりやや多、寄生葉率6.1% (平年2.2%) は平年より多である。

[防除上の注意]

- (1) 秋整枝を行う成木園では特別に防除をする必要性は低い、幼木園では密度が高まると、新芽生育初期から加害され、被害が増加する傾向があるので、ほ場を観察し、被害が激しい場合は追加防除を実施する。

7 チャノキイロアザミウマ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の見取り調査による発生面積率47.1% (平年33.4%)、寄生葉率3.4% (平年2.6%) はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) 秋整枝を行う成木園では特別に防除をする必要性は低い、幼木園では密度が高まると、新芽生育初期から加害され、被害が増加する傾向があるので、ほ場を観察し、被害が激しい場合は追加防除を実施する。

8 クワシロカイガラムシ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の巡回調査では、発生を確認していない。
(平年値：発生面積率19.9%、寄生株率5.4%)

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼虫ふ化最盛期なので、園内のふ化状況をよく観察して防除する。
(2) 県南部では、例年第4世代の発生する地域があるが、気温の高い傾向が続いているため、平年発生のない地域でも第4世代の発生が懸念されるので今後の発生状況に注意する。
(3) 薬剤散布は、枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤は使用しないこと。

- 3 発生量(程度)の区分

多	い	(高	い)	やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多	い	(やや高	い)	平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少	ない	(やや低	い)	平年並の外側 20%の度数の入る幅
少	ない	(低	い)	やや少ないの外側 10%の度数の入る幅 (平年値は過去 10年間の平均)

- 4 予察情報の種類

病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

- (1) 予 報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
(2) 注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
(3) 警 報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
(4) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
(5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp